

付
篇 I 日本宗教の世俗化と

「オウム真理教」

山
折
哲
雄

今年（一九九五）は、日本人の宗教が壊滅的な打撃を受けた紀元元年になる年かもしれない。いや、もっと正確に、ほとんど息の根をとめられてしまっている日本宗教の屍が白日のもとにさらけだされた年、といい直した方がよいのかもしれない。

そのことを象徴する二つの「事件」が、一月以来たてつづけに発生した。周知のようにその一つが一月十七日に突如として関西を襲った阪神大震災であり、もう一つが三月になって警察の強制捜査の手がのびたオウム真理教の事件である。

それではいったいどうして、この二つの事件が日本人の宗教の壊滅的な打撃の姿を浮き彫りにしているのか。はじめの阪神大震災についていえば、その現場に、宗教者の姿が影も形もみせなかったことにそれはかわる。災害地において被災者たちの身に寄りそい、救援活動にあたったのは全国から集まった「ボランティア」たちであり、心のケアのために奔走した「精神科医」や各種の「カウンセラー」たちであって、けっして「宗教者」たちの活動ではなかったからである。

むしろ、そういえばただちに反論が返ってくるにちがいない。災害地には、さまざまな教団や教派に属する宗教者たちがいち早くかけつけ、献身的な救援活動にあたってはいないか、と。救援物資を運び、被災者たちに語りかけ、精一杯がんばっているのではないか、と。たしかにその通りだ。そのような宗教者たちの姿がテレビの画面に映しだされ、新聞、雑誌でも報道されていた。

しかしながらその宗教者たちは、はたしてそれらの活動を宗教者

としておこなっていたのだろうか。宗教者としての言葉で、この未曾有の難局に立ち向かおうとしていたのだろうか。おそらくそうではなかったであろうと私は思う。そのような態度をとることははじめからできなかったのではないか。なぜなら宗教者の多くはほとんどボランティアとして現地におもむき、あたかも精神科医や心理カウンセラーのように被災者の心に近づこうとしていたようにみえるからである。

宗教者はこんごの大震災にさいして、宗教者であることの立脚地を喪失したまま、宗教者であるかのごとく振舞うほかなかったのではないか。そのことは震災の直後とその後経過をみればわかるように、その時間的流れのなかで宗教的言語が宗教者たちの口から直接語られることがほとんどなかったところによくあらわれている。

宗教者たちは宗教者としての立場をきわ立たせるかわりに、むしろ市民的ボランティアの一人としてそこにかかわり、心のケアにたずさわる精神科医や心理カウンセラーのごとき心構えで現場にのぞんでいたように私にはみえる。かれらがそのような非宗教的な存在へといわば変身をとげることを、マスコミの報道が強制し、全国的な救援体制の市民的掛け声が強制したのではなかったか。

世論が宗教者にたいして、宗教者として振舞うことを許さなかったのである。市民倫理は宗教的言語の登場にほとんど手をかさなかったのだといってもよい。こうして宗教は沈黙し、宗教家は独自の活動の場を奪われて窒息した。被災地の舞台に立つ救世主は、一貫して精神科医とボランティアたちだったのである。

こうして宗教の社会的役割が誰の目にも明らかになように地をはらったとき、それに追い打ちをかけるようにしてオウム真理教の事件が発生した。そのときまで宗教の存在をほとんど空気のように無視しつづけてきた社会は、いまさらのように異物のような宗教の影響におびえ、宗教そのものに不信と疑惑の眼差しをむけはじめた。それだけではない。オウム真理教への怒りと不快の感情を急激につのらせた市民感情は、宗教の活動にひそむ根深いかがわしさを告発し、不透明な闇のなかにうごめくデモンの発現を許すべからざる異物として排除しようとする勢いをあらわにしている。

そのような社会の動向や市民感情をいち早く察知したためである。既存の宗教教団はいっせいにオウム真理教の非宗教性をいい立て、新興の宗教教団もまた麻原彰晃の宗教活動を反宗教的なハネあがりとして糾弾しはじめた。

宗教教団としての保身のためにはしごく当然のことであったといわなければならぬ。わが身にふりかかりかねない火の粉を払うためにも、そういう態度にでざるをえなかったであろう。だがそれにもかかわらずそのような反撃は、おそらく宗教にたいする現代日本人の不信と懐疑の感情を押しとどめることはできないにちがいない。かれらがいかにか「善き宗教」と「悪しき宗教もしくは非宗教」を区別しようと、また「善き宗教」の存在理由をいくら主張しようと、日本の宗教にたいする世論とマスコミの批判はますます加速化されることはあっても、けっして抑制されることはないであろう。なぜなら仏教をはじめとする日本の宗教にたいするこれまでのもろもろ

の不満と疑惑が、こんどの事件によってダムが決壊にみられるように一挙に噴出したからである。その鉄砲水のような宗教批判、宗教不信は今後ますますその勢いを強めていくはずだ。冒頭に、今年は日本の宗教が壊滅的な打撃をうける紀元元年になるだろうといったゆえんである。

しかしよくよく考えてみると、日本の宗教がその権威を失墜しはじめたのは、周知のように今日このごろのことではなかった。たとえば仏教についていうと、この伝統宗教の空洞化がいわれだしてからでもかなりの歳月がたつ。そのような仏教のあり方を、異口同音に「葬式仏教」といって冷笑する態度がすでにわれわれの常識になり、それが「世論」とさえなっている。宗教法人法によって守護された観光寺院、葬祭寺院というレッテルがいつしか平均的日本人の意識の底にすみつくようになった。今回のオウム真理教の事件をきっかけにして、国会では村山首相が宗教法人の見直しということを行っている。それはたしかに、直接的にはオウム真理教の反社会的な宗教活動にたいして発せられた政治的発言であろう。しかしながら宗教法人法を隠れみのにして自己の利益を追求してきたのはオウム真理教だけではない。その恩恵を最大限にうけてきたのはむしろ仏教教団だったのではないか。そのように考えると今回の首相の発言が社会の動向と世論を背景に、どの点を戦略的目標にしているかが明らかにするはずである。

それでは神道の場合はどうか。日本の神道が戦前の国家神道の記憶を完全に払拭しえているかといえ、かならずしもそうとはいえ

ないだろう。戦後五十年たつてなお、神道は戦前の「外傷」を背負ったままだともいえる。日本の歴代の首相が靖国神社の参拝にこだわりの、年頭の伊勢神宮参拝をおこなう慣習が維持されているのを見て、神道と国家の結びつきを疑う世論のひろがりにはけっして軽視できないはずである。それに神道はたして宗教か伝統習俗かという議論もくり返されてきている。その議論のつみ重ねは神道の宗教的権威を弱めこそすれ、けっして強めたり高めたりするものではないだろう。ことあるごとに神道と皇室の関係がマスコミによってとりあげられてきているのも、宗教としての神道の自律性に影をさすものといわなければならない。そこで仏教の空・洞化というさきの例にならうていえば、ここではさしずめ神道の非宗教化といったことが問題になるかもしれない。

つぎに、われわれ日本人が軽い気持で宗教批判をおこなうときのステロタイプに、現世利益信仰にたいする批判がある。われわれはしばしば半ば自嘲気味にそれを口にし、しかしそれにもかかわらずそこにこそ「日本教」の本質が横たわっているのではないかと疑ってきた。そしてこのようなステロタイプ化した現世利益信仰批判をもっとも熱心に当然のこととしておこなってきたのがわが国の知識人たちであり、その知識人たちの思想を集約する形でマスコミの言論であった。

現世利益信仰とは、一口にいうと家内安全、^{ひとくち}身体健康、商売繁昌という言葉に象徴される信仰のことだ。日本の神社、仏閣にいけばいやでも目につく標語である。正月元旦の初詣で、春秋のお彼岸や

夏のお盆の墓詣りには、毎年のように押すな押すなの人出となる。そのとき人びとの心に蘇っているイメージが右の標語に象徴される現世利益の数々である。

ところがわが国の知識人とマスコミは、かつてこの種の大衆的な行動を宗教的な問題として真剣にとりあげたことがなかったのではないか。そこにみられる庶民の大衆行動を季節的な社会現象としてだけとりあげ、信仰の王道からははずれた周縁的な民俗信仰、第二義的な信仰行動とみなしてきたのである。「家内安全」を願う気持ちが、家族の崩壊という危機的状况に発する心の叫びであり、同様にして「身体健康」が、老・病・死に怯える民衆の不安に由来する祈りの言葉であることを、ことさらに無視しようとしてきたのである。ここで注意したいのは、まことに興味あることにそのような知識人やマスコミによる議論が、ほとんどの場合、無神論的な心情と論理によって支えられていたということである。その無神論的な思考のパターンはむしろヨーロッパ近代が獲得した知的遺産の一つであり、その遺産をそのまま受容してきた結果であったが、それによって日本人の伝統的な現世利益信仰が槍玉にあげられたのである。

それだけではない。そのようなヨーロッパ産の知的批判の刃は、さきにもべた仏教の空・洞化現象にたいしても容赦なくふりおろされ、そのほこ先は神道の非宗教化の問題にたいしてもむけられてきたのである。このような知的習癖を、私はここでもさきの例にならうて近代日本知識人の無神論化、と呼んでみようと思う。

以上私は、日本宗教における権威の失墜、崩落という問題を取り

あげ、その背景には大づかみにいって仏教の空洞化、神道の非宗教化、知識人の無神論化という三つの要因が横たわっているのではないかということを描いてみたのである。そして大切なことは、この三つの要因が、現代日本における宗教の趨勢もしくは宗教の世俗化という現状をよく説明するとともに、今回のオウム真理教の事件にみられるような一種の宗教反乱の発生にたいしても、ある種の暗い影を投げかけているのではないかということである。その点に注意をむけないかぎり、オウム真理教の「犯罪」はたんなる反国家的、反社会的な逸脱行為という面からだけとらえられ、この異常な事件によって浮き彫りにされつつある現代日本宗教の危機的な状況とその深部にメスを入れることにはつながらないことになるであろう。

とするならば、右にあげた三つの要因、すなわち仏教の空洞化、神道の非宗教化、知識人の無神論化という事態を、われわれは全体としてどう考えたらよいのだろうか。そのような事態は、そもそもどのようにして生じたのか。それがつぎの問題となる。結論を先どりしていえば、私はこのような事態が一面では近代日本におけるわれわれの自己認識の方法そのものから生じたのではないかと思っている。誤解をおそれずにいえば、その自己認識の方法が明治以後一世紀をこえる時の経過のなかで、いつのまにかわれわれ自身の生理と心理を支配するまでになってしまったのだといつてよい。それではそのような自己認識の血肉化の過程を、われわれはどのように理解したらよいのか。

一見迂遠な廻り道のようにみえるかもしれないけれども、私はそ

のような自己認識が形成される背景に、近代日本における二つの宗教政策が重大な役割をはたしていたと思う。第一が明治初年に断行された「神仏分離」政策であり、第二が第二次大戦後におしすすめられた「政教分離」政策である。この二つの「分離」の政策は、たしかに日本が西欧の近代文明と出会い、その果実を受容するうえで避けて通ることのできない道であった。前者は伝統的な神仏信仰における神と仏の共存の関係を断ち切り、後者は政治と宗教のあいだのあいまいな関係を明確化し峻別することによって、西欧市民社会がつくりだした生活のモデルを学習し模倣しようとするものだった。われわれはたしかにこの二つの「分離」の政策を、あえていえば西欧に学ぶ小学校生徒のように教科書通りに学習し実施に移してきただといえるかもしれない。だがその結果われわれは、同時に思いもかけない果実を手になつたのではないか。その果実の意味する事柄について、まずはじめに、明治期に着手された「神仏分離」政策における「分離」の問題をとりあげて考えることにしよう。

近代以前の日本人の伝統的な信仰は、さきにもふれたように神と仏を同時に礼拝し信ずるところに成り立っていた。神仏共存の宗教であり、神仏信仰といつてもいいものだった。しかし明治国家の神仏分離政策によって、人びとは神か仏か、そのどちらかを選択しなければならなくなった。神も仏もという神仏共存の伝統的な觀念が、神か仏かという二者択一の新しい理念にとって代られることになったのである。

その変革が、千年にわたる日本人の信仰のあり方を根底から変えようとする上からの改革であったということに注意しなければならぬ。むろん現実には、このような神仏分離の理念が神仏共存の伝統観念を完全にくつがえしてしまふほど強力に作用したわけではなかった。そんな「歴史」の破壊が、一片の法令や政策によっておこなわれようはずはないからである。しかしながらそれにもかかわらず、その「分離」の政策がその後の日本人の内面に与えた精神的外傷は甚大であった。今日われわれはやもすればその傷痕の深さを過小評価しがちであるが、それはわれわれが問題の本当の深刻さに気づいていないからにはかならない。

それでは、その精神的外傷とはいったいどのようなものであったのか。

よくきかされることであるが、日本人にいったい宗教はあるのか、信仰はあるのか、というジョークのような問いがだされることがある。わが国でおこなわれる宗教調査をみればわかるが、日本人の人口は一億二千万であるのに宗教人口の方は二億をこえる、といったことが話題になる。海外に出る日本の知識人が、あなたの宗教は何かと問われて、さてと考えこみ、迷ったあげくに「無宗教」とか仏教とかと半ば自嘲気味に答える。

そういうときわれわれ自身が心のなかに思い浮かべるイメージは、仏教や神道やキリスト教を、あれもこれもといった形で信じているらしい日本人の無原則の姿である。その無原則さに傷つき、やっきとなって否定しようとするけれども、しかしそれはいつも成功する

ことがない。なぜならわれわれは長いあいだ、信仰という問題を選択的に限定的に考えることをしないできたからである。

宗教調査をみればわかるが、たいいていの場合、あなたの宗教は何か、という設問が最初にでてくる。どの宗教に帰属するのかという問いである。その問いかけの背後にあるのはキリスト教に属するのかイスラーム教に属するのか、という問いの姿勢である。換言すれば一神教に属するのか多神教に属するのかと問うているのであって、その考え方には明らかにキリスト教的信念が反映している。

つまりキリスト教の立場においては、一神教と多神教というのはどちらかに所属すべきものであって、同時にその両者に所属することができないような性格のものではない。あくまでもあれかこれかの選択を迫られるものであって、あれもこれもといった態度をとる対象ではなかったからだ。

しかしこうした問いが、そもそもキリスト教的な世界観に由来していることに注意しなければならない。宗教とか信仰は主体的決断によって選ばれるものというわけである。その主体性の自覚にキリスト教はつよい力点をおいている。とりわけプロテスタント教がそのことを強調している。

だがこのような問いに直面する日本人の多くは、一瞬たじたとって、自分の心の奥をのぞきこむような気分になるのではないだろうか。なぜならその問いには、自分と他者（仏もしくは神）とのあいだの、一種の主体—客体関係を問う緊張がみなぎっているか

らである。その緊張に氣押されて、そのようなものは無いと思ひ直し、「ありません」という心にもない返答をする仕儀になる。

しかしながら私は、日本人の宗教観の根底にあるのは、宗教をそのような自覺的意識や主体的な選択行動ととらえるようなものではなかったと考える。それとは逆に、むしろそういうものの一切を消却していくところにこそ信仰の究極があると考えてきたのである。

日本の仏教や神道においては、多くの日本人がそのように信じてきたのだと思う。特定のセクトに排他的に帰属することこそむしろ本質的には非宗教的な態度である、とする世界観に立っていたのである。

日本人の多くは明治以降、キリスト教徒でないにもかかわらず、キリスト教徒の目で自目自身の内面に問いかけてきたという、笑うに笑えない事態がそこから浮かびあがってくるだろう。キリスト教的な世界観に立って、非キリスト教的な心の内景を眺め、イエス、ノーと条件反射的な返答をしてお茶をにごしてきたのである。

いわばわれわれは、外国人の宗教観のまなざしで日本人の心の奥を觀察してきたのだ。もっともこのようなコッケイな認識の倒錯は、かならずしも宗教観の問題だけにとどまらない。明治以降の日本人は、そのような自己認識のアクロバットを多かれ少なかれ強制されてきたのである。

こうして明治初年に断行された「神仏分離」政策は、そのような近代日本人の自己認識の出発点を象徴的に示すものだったといわなければならない。

もしもそうであるとするならば、第二の「分離」政策としての「政教分離」をわれわれはどう考えたらよいのか。この政策はさきにもふれたように、第二次世界大戦後になって現実軌道にのせられた政策であった。それ以来今日にいたるまで半世紀を経ているものである。

しかしこの日本の敗戦と同時に発効した「政教分離」の政策には、それと内的連関をもつ前史があったと思う。その第一が、明治初年代に実行に移された宗教政策であった。さらにいえば、中途半端な政教分離がそれであった。

明治憲法制定のためヨーロッパへ調査におもむいた伊藤博文は、西欧の憲法政治が千年の歴史をもち、人心を帰一させる機軸としてキリスト教が絶大な力をもっていることを知らされて帰国する。そしてそのキリスト教に対抗しうる「国家の機軸」を日本において見出すとすれば、それは「皇室」をにおいてほかにはないとする判断に到達した。

この伊藤博文の判断がやがて、帝国憲法第一条の「大日本帝国ハ万世一系ノ天皇之ヲ統治ス」になって実ったことは周知の通りだ。かれは、仏教も神道も宗教としての力を失ってしまっていると考えた。国家の基礎を支える精神原理としてすでに時代遅れになっていると結論づけたのである。それはむしろ、かれだけの個人的な意見ではなかった。明治国家の建設に参画した開明的な政治家たちの共通の認識だったといつてよい。

こうして「万世一系の天皇」という国家の機軸が、西欧社会にお

けるキリスト教の威力に対抗しうるただ一つの精神原理であると考
えられ、伝統的な神道儀礼がそれに応じて再編成されることになっ
た。すなわち天皇家の神話上の祖神とされる天照大神が近代国家の
始祖として拡大解釈され、新たな皇室祭祀が形成されたのである。

あえて誤解をおそれずにいえば、天照大神が西欧社会における神
(ゴッド)と対比しうる、聖なる権威の源泉とみなされるようになった
ということだ。

私はそこに、伝統神道のキリスト教化のあとをみることができる
のではないかと思う。神道の西欧化といってもいいし、神道の一神
教化の試みであったといってもよい。記紀神話において天照大神は
最高神の一つにすぎない存在であったが、それが急激な地位上昇の
気運にのって、唯一至高神の高みに祀りあげられるようになったの
である。

しかし、まさにここにおいて大問題が生じた。なぜなら皇室の万
世一系性を国家の機軸にすえ、それを神道儀礼に結びつけようとし
るのは政教分離の原理に反するのではないかという比判が、内外か
ら加えられるようになったからである。明治国家は、その近代化の
路線を軌道にのせるため、何とかこの比判をかわさなければならな
かった。そこで政府が苦肉の策としてつくりだした対策が、神道に
おいて祭祀儀礼と宗教性を分離するという、応急処置をほどこすこ
とであった。すなわち神道のなかから冥界信仰、葬儀、民衆教化と
いった宗教機能を切り離し、神まつりの祭祀儀礼だけを非宗教的機
能であると強弁して、その非宗教的機能なるものを国家による真接

の管理下におこうとしたのである。

これを一般には神道における祭祀と宗教の分離、という。いわば
国家に直属する神道から宗教性を抜くことで、非宗教的な祭祀と国
家の統合は政教一致ではない、したがって政教分離の原則には反し
ない、という説を立てて、形式的な政教分離を主張したのである。

しかしながらすでにみたように、これがきわめて不徹底で中途半
端な政教分離であったことはいうまでもない。それはそもそも、キ
リスト教に対抗しうる強力な精神原理(天皇の万世一系性)を国家の
機軸にすえようとしたところに生じた矛盾であったからである。あ
るいは明治国家の近代化政策そのものに起因するジレンマであった
といってもよいだろう。そしてこの中途半端な政教分離政策のおか
げで、日本の神道はしだいに神道そのものの非宗教化という思わぬ
果実を手になることになった。さきにのべた神道の一神教化という
近代化の政策が、こうして皮肉なことにはほとんど同時に伝統神道の
非宗教化をも促進する結果を招くことになったのである。

つぎに、「政教分離」の前史として考えておかなければならない
第二の問題をとりあげよう。それが、近代日本による西欧文明受容
の態度にかかわる問題である。

ここで詳しくのべているいとまはないが、かつて内村鑑三は、日
本の「大困難」は、日本人がキリスト教を採用しないでキリスト教
文明を採用したことにある、といったことがある。キリスト教抜き
の西欧文明の受容に血道をあげてきたと批判したのである。

考えてみれば、これは明治以降の日本が歩んできた道でもあった。

近代の「精神原理」を棚にあげて、近代の「制度」や「文明」の果実だけをひたすら盗用しつづけてきたということだ。そのことを、さきの内村鑑三の言葉は鋭くいいあてている。近代日本における西欧文明受容の仕方が、近代日本における知識人たちの無神論的な心情を育くむうえで大きく作用していたのだといってもよいだろう。その意味において右の内村鑑三の指摘は、近代日本にたいする批判であると同時に、近代日本の知識人にたいする内在的な批判であったといわなければならない。

そのことに関連して、もう一つだけいっておかなければならないことがある。それは、明治にはじまる日本の「近代化」にたいして、日本の伝統的宗教はほとんど抵抗らしい抵抗を示さなかったということだ。抵抗どころか、むしろその近代化の路線にすり寄り、その尻馬にのって自己の延命、保身につとめてきたといった方がよいかもしれない。その点では伝統的な神道も仏教も何ら変るところがなかった。たとえばヨーロッパの近代史を彩るような政治と宗教（キリスト教）のあいだの深刻な対立がわが国において生ずることはなかった。経済活動と宗教倫理のあいだに緊張と対抗の関係がみられなかったのである。

それだけ日本の伝統的宗教が世俗化していたということだ。さきの伊藤博文が、日本の伝統的な仏教と神道を新生の明治国家の「機軸」、すなわち西欧のキリスト教に対応するような「精神原理」とすることはできないと認識したのも、無理からぬことであったといわなければならない。

しかしふり返ってみれば、日本の伝統的な宗教（仏教と神道）が徹底的に世俗化していたればこそ、日本の近代化は短時日のあいだに効率のよい発展を上げることができたともいえるのである。明治百年の近代化の過程のなかで、「宗教」はほとんどその阻害要因としてはたらくことがなかった。葬式仏教という名の仏教の空洞化と、宗教としてのタガを外された神道の非宗教化（祭祀と宗教の分離）によって、伝統的な仏教と神道は明治国家による近代化という大事業をただ傍観者として眺める地位に退けられていたのである。

もっともその代償として、明治の近代国家は「国家神道」という人工的な疑似宗教をつくりだすことになった。なぜそれを人工的な疑似宗教と名づけるのかというと、それは表面的にはあくまでも国家の機軸をなす非宗教的な国家祭祀として位置づけられていたからである。そして現実的には、この人工的な国家神道は周知のようにもろもろの諸宗教の機能をこえる超国家的な精神原理（＝「神教的」神道宗教）として無類の支配力を行使したのである。その結果、いったいどういうことが生じたのか。この不徹底で中途半端な政教分離政策は、日本人の精神にどのような作用を及ぼしたのか。端的にいつてこの明治国家にはじまる神道の政策的な使い分け、すなわち神道における宗教性と非宗教性の使い分けこそ、狭くは神道にたいする極度に不信の念、広くは宗教一般にたいするぬぐいがたい疑惑の念を、ひろく日本人のあいだに植えつけることになったのである。

以上が、敗戦を契機として新たに誕生することになった「政教分

「離」的現在の前史的背景である。くり返して言えば、その前史的背景とは第一が神道の一神教化による不徹底な政教分離の過程であり、第二がキリスト教抜き西欧文明の受容、宗教原理抜き近代化の過程、であった。その二つの前史的過程をへて、われわれは敗戦後の「政教分離」政策をあらためて受け入れることになったのである。そこで、いよいよ本題である今日の「政教分離」について考えてみなければならない。敗戦後五十年の歴史をもつ「政教分離」政策について、その明暗、功罪を明らかにしてみることしよう。

「政教分離」といえば、すでにわれわれのあいだに常識のようなものができあがっている。その第一は、いうまでもなく政治と宗教の分離ということだ。政治の世界に宗教的信念を介入させてはならない、という考え方である。なぜなら政治は公的な性格のものだが、宗教は私的な領域に属する問題だからである。要するに政教分離というのは、公私の別をはっきりさせようということだ。

その第二は、政治は世俗的な事柄にかかわるものであるのになし、宗教の本質はカミヤホトケなど聖なる世界にもとづくものであるから、その両者を区別しなければならないという考え方である。

こうして政教分離というのは、公私の別、聖俗の別をはっきりさせて、政治と宗教の境界をつねに明確にしておくことになる。周知のようにこのような考えは、人類が長いあいだかかってつくりあげてきたものだ。古今東西にわたって政治と宗教の戦いの時代がつづき、政治と宗教の混淆、混同の時代がくり返されてきた。そういう苦難の道程をへて、政治と宗教を分離するという近代国家の理

念がつくられた。

私はこの政教分離の理念を、戦後の日本人は忠実に守ってきたと思う。むろん他方で政治家による靖国神社参拝の問題があり、地鎮祭などをめぐる自治体レベルでの裁判が発生した。係争中のものもすくなくない。しかしながらそれにもかかわらず私は、日本における政教分離の政策は諸外国にくらべて比較的順調に機能してきたように思う。それは公教育の場においても十二分の効果を發揮してきたのである。右にふれたいくつかの問題点はあるものの、全体としてみればほぼ教科書通りに実現されてきたといつてよいだろう。

たとえばイギリスの場合、国王はそのいくつもある称号のなかで「信仰の擁護者」というタイトルをもっている。また西欧の諸国では、国家が特定の宗教教団に財政援助をしているケースがすくなくない。そのうえよく知られたことであるが、アメリカの大統領は就任式のとき「聖書」に手をおいて誓約する。政教一致の立場をとる多くのイスラーム国家については、いうまでもない。

右のような例をみると、日本における政教分離がかなりの程度そつなく機能してきたというさきいったことがわかるだろう。かなりの程度、どころではない。世界の近代国家のなかで、ほとんど理想的な形でそれが実現されてきたのではないか。靖国参拝や地鎮祭などの問題がきびしく論議され裁判で争われてきているのも、裏を返せば、そうした政教分離の考え方が国民のあいだにそれだけ強く浸透しているからであるともいえる。

だが私は、まさにその地点において立ちどまる。一つの疑念がま

といってくるのを避けることができない。それを一口にいうのは難しいが、あえていえば、われわれは政教分離の原則をあまりにも忠実に、あまりにも教科書通りに守ろうとしてきたために、いつのまにか宗教にたいする軽侮の念を自分たちのうちに養い育ててきたのではないかということである。公の政治・経済の舞台から私的な宗教や信仰を排除することに熱中するあまり、宗教や信仰の価値をことさらに貶めたり忘却したりする道にすすみでしてしまったのではないか、ということだ。その宗教にたいする軽侮の念が、明治以降、日本の知識人たちの内面に育まれてきた無神論的な心情と重なり合って、現代に及んでいるように私にはみえるのである。

その結果、今日、政治や経済の運営にあたっていたるところにみられるように、宗教や信仰の領域の問題をいつでもカッコに入れてしまうという心的態度が生みだされることになった。公の政治と私の宗教の区別に神経質になりすぎた結果、私としての宗教の重大性への関心がかぎりなく稀薄になってしまった。いわば人間観の世俗化が行きつくところまでいってしまったのである。

一例をあげてみよう。土井たか子さんが社会党の委員長になったときのことだ。女性委員長の誕生、という華やかな話題を呼んだのであるから、その経歴が内外のマスコミによって詳しく報道されたのも当然であった。

そのとき外国の英字紙では、土井さんをクリスチャンとはっきり紹介していたが、日本の新聞のほとんどはその重要な経歴を無視していた。その後、土井さんが衆議院議長になっても、そのことは報

道されなかった。

そのためかどうか、わが国で土井さんが護憲の政治家であることは知ってはいても、キリスト教徒であることを知っている人はほとんどいないのではないだろうか。土井さんだけではない。戦後の歴代の社会党の委員長には、クリスチャン（それもプロテスタント教徒）が多かったのである。

そういえば、戦後の東京大学の総長をつとめた南原繁、矢内原忠雄もクリスチャンであった。しかしその宗教的背景について、日本のマスコミは積極的に報道したり解説したりすることを控えてきた。その伝統が土井さんの場合にも、そのままうけつがれたのである。いわば土井さんは、ご本人の意思とはかわりなく、公的な世界では「隠れクリシタン」の役割を演じさせられてきたのである。

私はさきに、わが国の知識人の大部分は、あなたの宗教は何ですかと問われて、当惑の表情を浮かべるという意味のことをいった。はてと考えこみ、迷ったあげくに、半ば自嘲気味に無宗教とか、仏教とか神道とかと口ごもって答えると書いた。そしてさらに、キリスト教信者であるにもかかわらず、公的な場ではキリスト教徒ではないかのごとくに振舞うというビヘイビアをこれにつけ加えてもいいだろう。

そこには、キリスト教抜きで西欧文明を受容してきた近代日本人の心の内景が、じつにみごとに映しだされているのではないだろうか。宗教というもののへの無意識的な軽侮の気持ち、西欧文明的雰囲気へののめりこむような軽信が、そこには入り混んでいるといっ

もよいだろう。そしてそのような知識人の心的な傾向が、いつのまにか、さきへのべたような現代の「隠れキリシタン」という現象を生みだしてしまったのではないか。

角を矯めて牛を殺す、ということわざがある。戦後のわが国における「政教分離」のかけ声は、ついにそのような驚くべき効果をあらわしはじめてるように思えてならない。とくにわが国における昨今の政治家や財界人の動きをみていて、私はその感を深くするのである。

私は小論の冒頭で、一九九五年が日本宗教の「終末」元年を画する年になるだろうという意味のことをいった。阪神大震災における宗教家の自己埋葬の実態とオウム真理教にかかわる自閉的な「宗教戦争」の異常な展開が、そのことを象徴的に明らかにしているだろうといったのである。とりわけオウム真理教が現在なお、社会と人心に与えつづけている衝撃は比類を絶するものがある。

その衝撃をひきおこした地殻変動は、いったいどこから襲ってきたのか。そのような問いにみちびかれて私は、仏教の空洞化、神道の非宗教化、近代日本人の無神論化という三つの思想潮流をキーワードにして、その歴史的な背景を探ってみたのである。その結果この三系列の主題がじつは近代日本に背負われた不可避の精神的外傷であったことを指摘したのであるが、それは同時に明治の「神仏分離」と昭和の「政教分離」という二つの「分離」政策と深い内的連関をもつものであったといったのである。

それらはもちろん、オウム真理教にかかわる今日の異常な事件を

直接的に説明するものではないであろう。そのうえ、この教団によってひきおこされた「宗教戦争」が今後どのような進展をみせるかは、いまだに予断を許さない情勢にある。また、麻原教祖の言動をはじめとしてこの教団に属する信者たちの生活様式や振舞いは社会の秩序と常識に真向から挑戦し、その異常な想像力の増殖はほとんど狂気に近いものさえ感じさせる。それだけにこれらのこのような言動にたいし、ただ非難、攻撃の十字砲火をあびせかけるだけでは、その「狂気」の本質をえぐりだし、これらの異常行動の根を絶ち切ることはおそらく難しいのではないだろうか。

われわれに今必要なことは、オウム真理教による暴走と狂気の集団行動を、われわれ自身が生きているこの近代社会のなかにしつかり位置づけるとともに、われわれ自身が体験し通過してきた自己認識の内実を真剣に点検してみることではないかと、私は思う。

今日われわれは、明治の「変革」以降、ほとんどはじめて精神の根本的なオーバーホールが必要に迫られているのではないだろうか。こんどの「事件」に際会して村山首相は宗教法人の見直しに言及しているけれども、そのような対症療法的な応急策だけで事態の本質的解決がはかれるとはとうてい思われないのである。もしもそうであるとするならば本当に見直すべきは、われわれの精神の内景を形成してきた、日本近代百年の歴史そのものではないだろうか。

〔付記〕 本論文はもと『諸君』誌（一九九五年六月号）に「オウム事件と日本宗教の終焉」として寄稿したものである。なおこれはのちに

Japan Echo, Autumn, 1995 12 'Aum, Shintō sounds the Death Knell of Japanese Religion' として英訳された。また同英文は同誌のフランスとドイツ語版にも翻訳されている。